



年中台詞を覚えていない夢を見る。とても怖い夢。
台詞覚えさえなければ、こんなに楽しい仕事はないのに… いつもそう思う。
 いつか覚えられなくなる。老いていく、衰えていく現実と俳優の業を
 突き詰め続けた記録は身内ならではの。結美さん凄い! そして
 最後を涙で一世一代の名演で締め括って下さった織本さん、有り難う。

根岸季衣 (俳優)

織本順吉さんほど、どんな作品にいても
違和感を覚えることのない役者はいません。
 物心ついた時から、ずっと「物語の中にいて当たり前」の人でした。
 当たり前であるはずの人の、当たり前ではない葛藤と苦悩を
 目の当たりして、役者で居続けることの過酷さを見せつけられました。
 しかし、お嬢様の結美さんの愛情とも呪詛とも言うべきフィルターを通して、
 親子の情愛を超えた凄みにただただ怖気付くばかりでした。

松尾貴史 (俳優、タレント、コラムニスト)

死が目前に迫っても使命を全うする。細胞の隅々まで俳優なんだなあ。
心、身体、脳、本当の限界まで、役を演じ続ける
 織本さんの、熱き魂を感じました。

中越典子 (俳優)

時に、駄々っ子のようになる織本順吉。しかしそれは、近い将来の私
 かもしれない。今までできていたことができなくなった自分自身への
 苛立ち。それは皆が通る道。死ぬ間際まで俳優であり続ける男と、
その家族との闘いが描かれた82分間。
 「うしろから撮るな」という言葉が、私には「目ん玉を見開いて、しっかり
見てろ」に聴こえる。織本順吉の姿から目を背けてはならない。

笑福亭銀瓶 (落語家)

老いは誰にでもあるけど、兎に角俳優として生きたい。
 このドキュメントでどうあがいても織本さんは俳優やで。
抱っこされてた娘さんのカメラに最後の演者が映ってたなあ。

綾戸智恵 (ジャズシンガー)

なぜうしろから撮ってはいけないのか?
 娘にとって父はドキュメンタリーの「被写体」。
 だが父は、娘が撮る作品の「主演」を務めていたのだ。
自らの醜態をも映し出す映像を観て父が漏らした言葉、
いや、「名台詞」に、心を鷲掴みにされた。

大島新 (ドキュメンタリー監督)

撮る者vs撮られる者、それが最期の対話だった——

日本映画に欠かせない名脇役の最晩年に娘のカメラが迫る。
 4年間にわたる執念のドキュメンタリー

3月29日 田より ロードショー!

当日一般: 1,800円 学生: 1,500円 シニア: 1,200円

前売券 (1,500円)	当日一般1,800円(の処)	劇場窓口にて絶賛発売中
上映時間	3/29 土 ~ 4/ 4 金★	10:00 ~ / 12:00 ~
	4/ 5 土 ~ 4/11 金	10:30 ~ / 12:20 ~

公開記念トークイベント開催!!
 3/29 土 10:00の回上映終了後
 初日舞台挨拶&トーク
 ゲスト: **根岸季衣さん** (俳優)
中村結美監督
 3/30 日 11:40の回上映終了後
中村結美監督によるティーチイン

★3/30のみ10:00~/11:40~ ※4/12以降は追って劇場公式サイト他にのご案内。 ※以降、トークイベント予定あり。

幼少の頃、父(佐田啓二)を亡くした私にとって、同世代の俳優である織本さんとお話できるのは、至福の時。映画全盛期の現場話を良く聞かせて頂きました。晩年の織本さんとは、テレビドラマ「風のガーデン」「最後から二番目の恋」でご一緒させて頂きました。80代後半にもかかわらず、ロケ現場の待ち時間には椅子に座らず、立ったまま、自分の出番を待たれていたことが印象的でした。「中井さん、僕はね、このドラマ(最後から二番目の恋)が大好きなんだ。人が人を憎んだり、暴力をふるったりしないこのドラマがね。このドラマが続く以上、ズーッと出続けたいんだ。宜しくね」と笑顔で仰って下さいました。その心根が、まさに織本順吉。さあ、稀代の名脇役、織本順吉、最後の主演映画。多くの方に観て頂きましょう。

中井貴一 (俳優)

「うしろから撮るな」果たしてその弁明は正直な言葉なのだろうか? 織本さんもまた、「どう撮られるか」よりも「与えられた世界をどう生きるか」に懸念であつたように感じられる。カメラのレンズの向こうが黄泉の国であるかのようにも思われ、恐ろしく感じていたのかも知れないけれど。死神に魅入られるような? 「生きたい」「演じたい」と、弱った体に喝を入れて?

佐野史郎 (俳優)

去年から東映のサブスクに入って、『警視庁物語』という刑事ものを見ていたのですが、そこでも織本さんがほぼレギュラーで24本(1956年~1964年まで)役柄を変えて出演されていて、すごく懐かしく拝見していたばかりでした。昭和世代にとっては、日常的に拝見する俳優さんでしたから。
 ある動画で、痴呆で入院するかつての名プリマが、『白鳥の湖』の音楽をかけると、上半身だけですが見事にオデット姫を踊って見せる様を見たことがあります。
演じることと、カメラと、実人生、全てが一つになったような最後の場面に鳥肌が立ちました。 凄くお父様ですね。
 公開のご成功を祈願しております。

橋口亮輔 (映画監督)

今年80歳になる私にとって、10年先(もっと早いかな?)に訪れるであろう死期の姿を見せつけられているようで、観ている間じゅう激しく心が波打っていた。主人公を軸に家族の葛藤が描かれているが、命が燃え尽きるまで互いを気遣いながらも本音をぶつけ合う姿が羨しかった。叶うものなら、私もこの主人公のような往生を遂げたい。

原一男 (映画監督)

うしろから撮るな

俳優織本順吉の人生



公式サイト

新宿K's cinema

新宿駅南口階段下甲州街道沿
 ドコモショップ左入ル

Tel.03-3352-2471 www.ks-cinema.com/

劇場HPにてインターネット予約できます。 ※鑑賞日の3日前AM0:00より対応。詳細は劇場まで

